

2019 年度AO選抜 文学部 コミュニケーション学域
「国際方式（英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語）」

【選考講評】

1. 実施状況

志願者数、合格者数等

学科・学域・専攻	志願者数	一次合格者数	最終合格者数
コミュニケーション学域	16	8	6

2. 第一次選考<ES（エントリーシート）と課題レポート・志望理由書等>

(1) 評価ポイント

本学域を希望する受験生は、全体として英語に熱心に取り組む姿勢が見られました。ただ、大学は単に英語「を」学ぶところではなく、英語「で」何を学ぶかが問われる場所です。この点で、英語以外の教科の学習や課外活動への取り組みも重視しました。とりわけ本学域の学びの基礎となる国語や社会科（世界史、日本史など）といった科目をしっかりと学んだかどうか、は重要な評価ポイントです。また、単なる留学の経験ではなく、その国や地域の言葉・文化などを深く学んでいるかどうか、という点も考慮しました。

(2) 解答状況

入学試験要項をしっかりと読まず、思い込みや先入観が先走っているような志望理由書を見かけました。また、他学域の学びを混同して書いているものもありました。大学のパンフレットや文学部ホームページなどで、本学域の教育方針や具体的なカリキュラムについてしっかりと確認をしていないことは減点ポイントとなります。また、たとえ本学域の募集要項に沿った内容の文章でも、型にはまったような表現に終始する文章も高い評価は得られません。実際に個性の見えない解答が多くありました。合格した解答は、その人が高校生活を通して学んだこと、体験したことをしっかりと記述した上で、本学域のカリキュラムに即した大学での学びのプランを組み立てる事ができていました。受験生自身が、高校で何を学び、体験し、それを基礎に大学でどのように発展させたいかがストレートに伝わってくる文章が望まれます。

3. 第二次選考<面接試験>

(1) 評価ポイント

面接では、高校での学びや課外活動、留学体験や、それらを通して学んだこと、感じたことなどについてまず聞き、続いてそれらを大学入学後の学び、さらに将来のキャリアにどのようにつなげていきたいか、について話してもらいました。それらの質問に対して、自分の言葉で明快に答えられれば高い評価がされますし、逆に曖昧な返答であったり、あまりにも漠然としていて具体性に欠いた説明しか出来なければマイナス評価となりました。

(2) 解答状況

受験生は面接の準備をしっかりと行ってきていました。入試の面接はドアの叩き方

やお辞儀の角度で合否を判断するわけではなく（挨拶や基本的な礼儀は大事ですが）、それよりも大学で何を学ぶかという中身が重要となります。普段から自分の頭を使って考え、五感をフルに活用して感じているかどうか、さらにその内容について、自分の言葉でしっかりと表現出来るかどうか、を面接では問います。自分の関心や今後のビジョンに即した具体的な学びを自分の言葉で表現できた受験生が高い評価を得ました。

(3) 試験（面接）内容

高校までの学びや課外活動、留学体験を通して考察したことや達成したこと、それらをもとに、大学での学びにいかに関心があるか、といったことについて面接で問いました。

(4) 出題（面接）の意図

学問に対する積極性や真摯さ、目的の明確さや大学生活に対するビジョン、また思考力や分析力があるかどうか、さらにそれらを言語化して自分の言葉で表現できるかどうかについて読み取ろうとしました。

(5) 受験生に望むこと、その他気付いた点

英語力の向上のみならず、高校生活における日々の学びや周囲の人々との交流など、日常生活の積み重ねが、この入試では重要になります。ただ漠然と英語のスコアを取り、何となく海外で生活をしているだけではなく、人とは何か、人が集まって形成するコミュニティとは何か、さらに人や社会をつなぐ、あるいは妨げるコミュニケーションとは何か、といった本質的な問いに向き合う姿勢を日頃から心がけて欲しいと思います。それが大学での学びや、社会に出てからの社会貢献に大きく寄与するはずで

以上